人恋しさは高くつくのだ

漓江下りから戻ってしばらくホテルの部屋で休憩したあと、火車站へ下見に行った。明日は市内観光を途中で抜けて南寧行きの列車に乗ることになるので、おそらくあわてることになるだろうと思ったからだ。

バスや乗用車が激しく行き交う中山路を渡り、雨に濡れた駅前広場を横切って候車室へと向かうと、また雨が降ってきた。

雨は降り始めたかと思うと、急にどしゃ降りになった。あわてて候車室の中に飛び込んだ。

いちおう候車室の内部を確認したあと外へ出てみると、雨はまだ降り続いて、候車室の軒端には雨宿りの中国人たちが鈴なりになっていた。このあとは市内の中心部を歩いて晩飯を食べるつもりだったのだけれども、降りしきる雨の中に飛び出す気にはなれなかった。煙草を吸いながら、ぼんやりと降る雨に視線を漂わせていた。

候車室の前には売店が並んでいたので、暇にまかせて覗いていった。パンやジュースなどの軽食、それにビールや煙草。歯磨きや石鹸などの日用雑貨、それに電気製品。電気カミソリやドライヤー、ラジオ、それにヘッドホンステレオ。

僕はガラスケースの中に陳列されたヘッドホンステレオに注意を引かれた。ほとんどは『ＳＡＮＮＹ』というように日本の有名メーカーの商標をもじったような会社名をつけていたけれども、製作は広州や深圳などのおそらくは合弁企業。値段は六、七〇元。日本円にして一二〇〇円から一四〇〇円なのだ。それでも一般の中国人にとっては安いものではないけれども、高ねの花というわけでは決してない。僕はちょっとした驚きを感じる。日本文化（ヘッドフォンステレオは文化なのだ）はそのようにして開放経済の中国に浸透していくのだ。

そうこうするあいだに雨は止んでしまった。南国のスコールのような雨なのだ。降り始めたかと思うと激しくなり、すぐに止んでしまう。

とにかくバスに乗って繁華街の方へ出てみようと、駅前広場を歩き始めた。

水たまりを避けながら駅前広場を横切って大通りに出ようとすると、女性の二人連れに声をかけられた。話しかけてきたのは僕と同じくらいの年格好の女性で、かたわらでもじもじしているのは二〇才前後の女性。

女性の言葉はあまり分からなかったけれども、雰囲気で僕はそれと理解する。年かさの女性は僕が手にしていた地図に、

『去玩開心』

と書き込んで、

「二〇〇元。あなたのホテルへ一緒に行きます」

と言う。売春なのだ。

僕はすぐに納得した。社会主義もクソもないのだ。金持ちの外国人観光客が札ビラを切り、その落した金によって成り立っている街なのだ。むしろこういうことは当たり前のことのように思えた。

もちろん僕は買春をする気はなかったのだけれども、ふと当の二〇才くらいの女性の方を見ると、顔を赤くしてうつむいていた。

しばらく年かさの女性と僕とのやりとりを見ていたのだけれども、

「やっぱり、止めとこうよ」

と次第に尻込みするのだった。

年かさの女性も半分逃げるように遠ざかっていく若い女性を追いかけるようにして離れていった。

駅前から路線バスに乗ってメインストリート中山路を北上し、市街地へ。地図を見て、もうひとつのメインストリート解放路との交差点付近のバス停『楽群路口』で下車することに決める。

「ラー、ジュン、ルー、コー」

たどたどしく行き先を告げると、車掌はもう一度聞き返したあと、「分からないね」というように肩をそびやかす。
僕は少しあせって、隣の青年に尋ねた。
「這字怎嗎念（この字はなんと読みますか）？」
「ラージュンルーコー」
カタカナで書くと同じになってしまうのだけれども、僕の発音とはまったく違う。まず第一にバス停名なのだから異なる四つの漢字でできあがっていると考えるべきではなくて、それ自体がひとつの言葉なのだ。そしてひとつの言葉であればそれぞれの発音は平板に並んでいるのではなくて、流れの要所、ポイントというものがあるのだ。この場合は「ラー」と「ルー」だけが重要で「ジュン」と「コー」は軽く添える程度の発音で十分だ。
要は思い切りの問題なのだ。果たして伝わるだろうかと半信半疑で言ったのでは伝わらない。言葉はメッセージや思いを乗せて生きる。メッセージや思いの乗っていない単なる発音としての言葉はまだそれ自体としては生きてはいないのだ。どのようにして発音は言葉になるのだろうか。たぶん、思い切りによってなのだ。
僕は中国という大河を目前にする一個の日本人なのだ。とりあえずの手がかりとしてごく初歩的な中国語の基礎知識がある。それは中国という大河に浮かんだ丸太のようなものだ。指先で丸太をつついてみても河を渡ることはできない。思い切って飛び移ることだ。たとえ沈んで溺れても…。
「ラージュンルーコー」
と呟きながら、さっきの青年が肩を叩く。
たとえ沈んで溺れても、たぶん小さな親切が助けてくれる。

楽群路口から桂林王城へ。
桂林王城はかつて明の創始者朱元璋が甥の朱守謙をこの地の王として任命したときに建造された。現在は広西師範大学として使われている。王城の北部には市内の奇峰の中で最高峰の独秀峰がそびえ

ている。
すでに午後六時も過ぎていて、独秀公園には入れなかったので、城門をくぐり抜けて、解放東路から中山路をぶらぶらと歩いていった。適当な食堂を見つけて食事をするつもりだった。
レンタサイクルに乗った西洋人のグループが陽気な笑い声を上げながら通り過ぎていく。通りすがりの女の子をつかまえて、スナップに収まる。突然芸能人にでもなったかのような女の子のくすぐったそうな当惑と、西洋人観光客の陽気な強引さ。
やがて中山路は榕湖、杉湖と名付けられた湖を渡る。（榕湖と杉湖は中山路のところでくびれた形になったひとつながりの湖で、中山路の西側が榕湖、東側が杉湖と名付けられている。）
歩道では数人の盲のひとたちが胡弓を弾いていた。
榕湖のほとりに下りていくと、榕湖は曇天の下にひっそりと静かだった。曇天は落日のなごりを留めて淡く輝き、静かな湖面は湖畔を囲む榕樹の緑と遠景の奇峰を上下対象に映していた。
かたわらでは青年がひとり釣りをしていた。釣りとはいっても、釣り竿を使ってするのではなくて、手製のリールのようなものに糸を巻きつけた道具をを使うだけだ。竿のない投げ釣りのようなもの。
静かな榕湖のほとりで静かな情景を眺めながら、煙草を一服。

杉湖の方も眺めてみようと思って、中山路を横切り、杉湖北路を歩き始めると、歩道にたむろしていた数人の若い女性が声をかけてきた。駅前でのできごとがあったので、すぐに売春だということが分かった。
「不要」
と繰り返して断わるのだが、女性たちの中の二人はどこまでもあきらめずについてくる。ひとりは二〇才過ぎくらい、もうひとりは僕には一五才くらいに見えた。化粧気もなくて、売春婦というよりもむしろチンピラという印象だ。
歩道の柵にもたれて、しらんぷりをしながらも彼女たちの声に耳

を傾けている僕は、やはり人恋しいのだった。ずっとひとりの旅だから、人と話ができるというだけで気を許してしまうところがあるのだろう。「こいつはカモだ」と彼女たちも思ったのだろう。「不要」と繰り返す僕の返答などには臆するところもなく、言葉をまくしたてる。

ふと、通りすがりの男が彼女たちに言葉を投げつける。その意味は分からなかったけれども、言葉の雰囲気でとても汚い言葉なのだと僕は直観した。そしてその瞬間に僕の運命は決まる。

腹も減ってきたし、そろそろ断固と拒絶の態度を示して立ち去ろうかと考えていたのだけれども、その瞬間に僕の振り子は彼女たちの方に傾いてしまったのだ。沈黙と拒絶の態度の代わりに僕は、

「我餓了（腹減った）」

と答えてしまった。彼女たちはその言葉に食いつき、そのまますると一緒に飯を食いに行くという話になってしまった。飯をおごるくらいなら安いものだと考えたのだった。

日の暮れ落ちた繁華街をしばらく歩いて適当なレストランに到着すると、年上の女性がひとり入っていく。何事かを交渉しているような様子だった。しばらくして首を振りながら出てくると、

「ここはダメ」

というような様子を見せて、次のレストランを捜す。そのことの正確な意味はつかめなかったのだけれども、もちろん何かひっかかるところはあった。せっかくのカモに飯をおごらせるというだけですむはすはないのだ。おそらく何かの仕掛けがあるのだろうと僕は考えたのだけれども、僕はむしろボる彼女たち、ボられる僕自身の姿に最後までつきあってやろうという気持ちだった。

何軒かのレストランに当って、ようやく中国風丸テーブルに腰を下ろした。それは決して豪華レストランというわけではなかったが、桂林という大観光地のレストランという風ではあった。大きな丸テーブルがいくつかと奥座敷があるようだった。

先客のテーブルを見ると食べ散らかした大小の皿が壮快に並んで

いる。何度見ても感心するのだけれども、中国人の食事は豪快だ。いかにも高そうな料理をいく皿も並べて、豪快に食事をする。食べられない骨や皮などはテーブルや床に捨てる。いつも一品か二品のおかずでつつましくひとり食べている僕などはいかにも貧乏人なのだ。その貧弱な食事姿はひとりだから仕方ないのかもしれないが、いつも料金の計算が頭のどこかから離れない自分のみみっちさを見せつけられているような気がする。（もちろんこのような豪華な食事を日常的にするのは一部の金持ちに限られているのかもしれないし、ひとり当たりの料金は考えているほどは高くないのかもしれない。しかし中国人たちが僕たち以上に食事というものを大事にし、また楽しんでいるというのはまちがいないと思われる。）

テーブルに腰を下ろすと、年上の女性はさっそくメニューを広げて、「これはどう？　これは？」というように次々に注文する。ここでいまさらしみったれても仕方ないので、僕は「よきに計らえ」と、おうように答える。頭の片隅ではいくらかかるのかとビクビクしながら。

注文した料理は一品が二〇元から三〇元の料理で五品ほど。魚や肝や貝の料理、それから野菜の炒めもの。さらに彼女はしきりにアルコールを勧めるのだったが、あまり欲しくはなかったし酔っ払ってしまうのはまずいように思ったので、それはことわった。代わりにココナツジュース。

さらに彼女はメニューのページをめくって追加の料理を勧める。メニューのその欄の料理には値段がついていなくて、ちょっとまずいなと僕は思う。日本科理でも値段のついていない季節料理などは高いものだ。おまけに漢字をいくら見ていてもどんな料理か見当もつかない。首を傾げながら躊躇していると、店の人が表に僕を連れ出して材料を見せてくれた。体長五〇センチほどのトカゲのような爬虫頻や蛇。思わず後退り。「不要」を繰り返す僕。

「それならばこれはどう？」

と言いながら、彼女はカニの格好をする。さっきまずいなと思っ

たことも忘れて、思わず僕はＯＫしたのだった
　たらふく食べて、たらふくテーブルを汚して（そのような彼女たちの食事の様子を日本人が見たらおそらく汚いと言うだろう。だが脇目もふれずに普段はあまり食べたこともないのだろう豪華料理を一心にむさぼる年下の女の子の様子は、むしろなにか感動させるものがあった）。さて店の人が紙切れに書いて差し出した料金は、なんと三三〇元。おまけに外国人はＦＥＣで支払わなければならないと言う。
　値段が不明のカニ料理のことを考えても、二〇〇元もいかないだろうと考えていた僕はショックのあまり明細を確認することもないままにそそくさと支払ったのだった。
　年上の女性はあたかも平然と支払いをしているかのような僕の姿を見て、
「いったいいくら持っているの？」
　とひとり言のように呟いた。
　レストランを出てからもしばらくは彼女たちはしつこくついてくるのだったけれども、一食が三三〇元にもついてしまったショックもあって、不機嫌に
「不要！」
　と強く言うと、あきらめてきびすを返した。
　たぶん彼女たちはレストランの人とグルになってボったのだろうと思う。最初、何軒かのレストランに当たっていたのは、共謀の片棒を担いでくれるレストランを捜していたのだろう。
　ムカムカとわき上がってくる腹立ちを抱えながら中山路をホテルの方へと向かった。だが僕の腹立ちは屈折しているのだった。ある程度ボられること、カモにされることは彼女たちの相手になったときからある程度は想像できたし、むしろ僕はそのことを味わってさえいた。僕の腹立ちは彼女たちに向かうベクトルのはっきりしたものではなくて、ベクトルのない鈍痛のような腹立ちだった。どうして料金の支払いのときに、修羅場を演じられなかったのかという自

分自身に対する腹立ちだった。カニ料理の値段は確認していないのだから何を言ってもダメだ、と妙に先回りして納得してしまう自分が苛立たしかった。このようにして僕はいつも現実というものを迂回してしまうのかもしれないと思う。

暗い繁華街の歩道には数知れない若者たちがうごめきあっていた。何も分からない外国人の僕にとっては、行き場のない無数の若い欲望がうごめくマグマのようなひしめきだった。ここは桂林、ある意味では開放経済の先端をいく広州や上海以上に開放された街なのだ。しかもその観光都市という性格は経済都市としての開放よりも非定形なものにならざるを得ない。経済という通路を持たない欲望はより非定型に渋滞し、ガラス越しの希望をその手につかもうとうごめくのだ。マグマのような無数の欲望が暗い夜の歩道にひしめきあっていていた。無防備な外国人観光客（カモ）としての僕はそのマグマに指を出して、ちょっとした火傷をしたというわけだ。

だが、この温度差はいったい何なのかと、僕は思う。もちろんそこには経済がからんでいるのだけれども、ここで僕が考えていることはそのことではない。外国人観光客として否応なしにマニュアル化されシステム化されている自分という存在のこと（一冊のガイドブックは立派なマニュアルだ）なのだ。システムに取り込まれる度合に従って、僕たちは抽象化し、カモ化する。一方の現地人たちにとってはそこは生きていく場であり、生きていかなければならない場なのだ。そこにはどうしようもない体温の差がある。だが僕はどうするべきだっただろう。徹底的にマニュアルに従って、あらゆる危険をあらかじめ避けるべきだっただろうか。

たまたま目についたスタンドで冷えた（！）桂林啤酒（二・二元）を買って、ひしめく若者たちをかきわけるようにしてホテルへと房った。

たっぷりとお湯をたたえたバスに入り、ゆっくりとテレビなどを見ながら桂林啤酒を飲んでいると、酔いとともに腹立ちは霧散する。しかも久しぶりの冷たいビールはおいしいのだ。

ここ桂林では観光客以外の何者でもない。しかし観光客であるということはどういうことか。そのことを知るためにこそここに来たのだと僕は思う。観光客とは会社員や消費者と同じようにシステムによる存在の取り込みであり、抽象化なのだ。僕は日本というとても抽象的なしかも均質な社会からやって来た。自分という存在の手ぎわりが欲しくて中国大陸に足を踏み入れたのだ。そしてこのちょっとした火傷こそがもしかしたらその手ざわりというものなのかもしれないと思う。売春を誘いかけた女たちや、彼女たちとの食事の体験が風光よりも山水よりも貴重なものに感じられてくるのだった。

※

翌日、桂林市内の観光は漓江下りとは違って中国人たちと一緒だった。ミニバスに満員の三〇人ほどの観光客はすべて中国人で、外国人は僕ひとり。新婚旅行や家族旅行のように見える中国人に混じって市内の名所をめぐる。ガイドは若い女性で、もちろん中国語の言葉は分からないのだけれども、たったひとりの外国人の僕にしきりに気を使ってくれるのだった。観光客であふれる名所を歩いているときにも、迷子になりはしないかと振り返り、僕の姿を確認するたびに安心したように微笑む。

観光バスは最初に、漓江岸にある象山公園に到着。公園にそびえる象鼻山はその名のとおり鼻をたらした象のような形をした山で、鼻と体の間にあたる部分が空洞になっている。漓江岸には中国の各地からの観光客の華やかな賑わいが広がって、女性たちのカラフルな姿が目にあざやかだった。彼らは岸辺の公園のそこここで写真を撮りあったり、ボートで遊んだりするのだけれども、ひとりの僕はひととおり景色を眺めたあとはすることがないのだった。

、集合時間前に公園を出て観光バスを捜していると、ガイドはずいぶん早く戻ってきたのねというようにあきれた顔をする。集合時間の九：五〇を九：〇五と間違えてしまったのだ。公園にもう一度入

場しても仕方がないので、漓江岸の歩道をぶらぶらとして時間をつぶした。そんな姿を見て心配になったのかもしれない。ガイドの女性はなにくれとなく僕に注意を向けるのだった。

象山公園のあとは芦笛岩という鍾乳洞の見学。ここにももちろん観光客があふれて、観光客は数珠つなぎになって鍾乳洞の狭い見学通路をたどっていく。鍾乳洞の専属のガイドがグループを先導し、懐中電灯で様々な形の鐘乳石を照らし出しながら物語を披露する。それぞれの形などから連想される物語がそれぞれの鍾乳石にはつけられているのだ。ガイドの話を聞きながら、観光客たちは「ホオ！」と感心したり、「フフフ」と笑ったりする。僕にはほとんどガイドの中国語は聞き取ることはできなかったけれども、中国人の連想は日本人の連想とはそんなにかけ離れてはいないらしく、ある程度は彼らの反応にもついていくことができた。また様々な色彩にライトアップされた鍾乳洞は美しく、それだけで十分に楽しめるものだった。

芦笛岩の次には畳彩山に登った。桂林市内には独秀峰をはじめとしていくつかのカルスト山がにょっきりとそびえているのだけれども、この畳彩山もそのひとつだ。

ふもとから山中へと入っていくと、釈迦像や風洞という洞穴があり、それらを見学したあとはひたすら石階段を登っていく。僕はふと南岳の石階段を思い出していた。もちろん南岳の石階段に比べるとたいしたことはなくて、すぐに頂上。しかし頂上からの眺望は思わず息を飲むほどすばらしい。

薄曇りの空の下には彼方までカルスト地形特有の奇峰が延々と鈴なりになっている。眼下には桂林の市街地が横たわり、並木のこんもりとした緑が生い茂っている。漓江の水は薄曇りの空を映して鉛色に輝き、静かにその流れを運んでいた。

頂上の売店でパインジュースを買って飲んでいると、ガイドの女性が写真を撮ってあげましようと声をかけてくれる。しばらく頂上で休憩したあと、三々五々石段を降りていった。

ふもと付近にはお土産物屋が店を出していて、陳列台にはひすいの飾りものや特産品の食べ物などが並べられている。ゆっくりとひやかしながらふもとへとかった。

畳彩山を出発した観光バスはしばらくして街中で停車し、ガイドの女性は僕を降ろして目前の食堂に案内し、「ここで昼食をとっていなさい」と言い残して、バスに乗ってどこかへ行ってしまった。

お昼もはるかに過ぎて、午後三時発の南寧行きの列声に乗り遅れはしないかと心配だったのだけれども、たぶん他の観光客を次の観光地へ案内しに行ったのだろう。そのあとでホテルまで送ってくれるのかのしれない、と考えた。

青椒ロースーと玉子焼きとごはん（一七元）を注文した。ひとりで見知らぬ食堂に置いていかれてちょっと不安だったけれども、食事を食べおえた頃にガイドは戻ってきた。彼女のあとについてしばらく歩いていくと、昨日の桂林王城の城門内の公園だった。彼女はたまたま停車していたタクシーをつかまえて海外賓館まで行くようにと交渉した。料金は八元。

ガイドの女性の心配りに感謝してホテルに戻り、事務所で火車の予約チケットを受け取って桂林站へと向かったのだった。いつもチケットの購入に苦労することや服務員の横柄な態度に出会うことが多いので、すべてがうまく手配されていることに驚きながら。

なにはともあれ桂林観光を終えてひとりになって、僕はちょっと肩の荷を下ろしたような気分になる。もちろん十分に楽しんだ観光ではあったのだけれども、どこかでどうしても通らなければならない峠という気分もあった。ここまで来て桂林を見なかったなんて話にもならないという通念が僕の中にあったのかもしれないし、中国における僕の旅の一方の極として漠然ととらえていたのかもしれない。つまり典型的な外国人観光客の旅として。

特快列車（特急）に揺られながら、僕はようやく『果て』に向かうことができるのだという気がかしていた。目的地は広西壮族自治

区の区都、南寧、さらには雲南地方の昆明。

僕は漠然と、意識しないままに『果て』を求めていた。もしかしたらその土地そのものはあまり問題ではなかったのかもしれない。自分が『果て』と納得できる何かを求めていた。もちろん雲南は中国のひとつの果てではあるだろうが、そこに暮らす人々にとっては果てでも何でむない。国境も地理も果てにはなりえないのだ。僕は何も答えを持っているわけではなかった。ただ漠然と『果て』を求めて、列車に揺られていた。特快列車の硬座には旅をする中国人たちの日常が繰り広げられているだけだったけれども。